

新健康協会では、新しい健康法を伝える「健康新聞」を毎月発行し、人間の持つ治癒力や適応力をお伝えしています。肉体的、精神的なことでお悩みの方もぜひ御一読ください。

健康新聞

発行所
発行人

新健康協会

〒813-0001

福岡市東区唐原6-7-1

TEL:092-661-1531

https://shinkenko.jp



次の御論文は、明主様(当協会の教祖)が、昭和二十三年に発表されたものであります。世界平和と心身共に健全な人間作りを目指す活動に御理解を頂ければ幸甚です。

善と悪

世の中は善悪入り乱れ、種々の様相を現している。即ち悲劇も喜劇も、不幸も幸福も、戦争も平和も、その動機は善か悪かである。一体、どうして善人もあれば悪人もあるのだろうか。この善悪の因つて来るところの何か根本原因がなくてはならないと誰しも思うであろう。

今私にここに説かんとするところのものは、善と悪との原因で、これはぜひ知っておかねばならないものである。勿論普通の人間であれば善人たる事を冀い、悪人たる事を嫌うのはあたり前であり、政府も社会も家庭も、一部の人を除いては善を愛好する事は当然であって、平和も幸福も悪では生まれない事を知るからである。

私は分かりやすくするため、善悪の定義を二つに分けてみよう。即ち善人とは「見えざるものを信ずる」人であり、悪人とは「見えざるものは信ぜざる」人である。従って「見えざるものを信ずる」人とは、神仏の存在を信ずる、いわゆる唯心主義者であり、「見えざるものは信じない」という人は唯物主義者であり、無神論者である。その例を挙げてみよう。

今人間が善を行う場合、その意欲は愛からであり、

慈悲からであり、社会正義からでもあり、大きくみれば人類愛からでもある。そうして善因善果、悪因悪果を信じて善を行う人もあり、憐憫の情、やむにやまれず人を助けたり、仏教でいう四恩に酬いるというような報恩精神からも、物を無駄にしない、勿体ないという質素、儉約等、いずれも善の現れである。また人に好感を与えようとし、他人の利便幸福を願い、親切を施し、自己の天職に忠実であり、信仰者が神仏に感謝し報恩の行為も、神仏の御心に叶うべく努める事も、皆善の現れである。まだ種々あるが、大体以上のごとくであろう。

次に悪事を行なうものの心理は全然神仏の存在を信ぜず、利欲のため人の眼さえ誤魔化せば、いかなる罪悪を行うも構わないという虚無的思想であり、欺瞞は普通事のごとく行い、他人を苦しめ、人類社会に禍いを及ぼす事などは更に顧慮する事なく、甚だしきは殺人さえ行うのである。そうして戦争は集団的殺人であって、昔からの英雄などは自己の権勢や、限りなき欲望のため大戦争を起し、「勝てば官軍」式を行うのである。「人盛んなれば天に勝ち、天定まつて人に勝つ」という諺の通り一時は華やかであるが、必ずと言っていい程最後には悲惨な運命に没落する事は歴史の示すところで、勿論動機は悪である。

このように人の眼さえ誤魔化せば、いかなる事をしても知れないという事であれば、出来るだけ悪事をして栄耀栄華に暮らすほうが得であり、利口—という事になる。また死後人間は零となり、霊界生活などはなれと思ふ心が悪を発生する事になる。しかるに、如何程悪運強く一時は成功者となっても、長い眼で見れば必ずいつかは没落する事は例外のない事実である。第一悪事を犯した者は年中不安焦躁の日を送り、いつ何とき引つ張られるかわからないという恐

怖に怯え、良心の呵責に責められ、遂には後悔せざるを得なくなるものである。よく悪事をしたものが自首したり、掴まってからかえって安心して、刑罰にあう事を喜ぶ者さえある事実を、我等はあまりに多くみるのである。それは即ち神より与えられたる魂が、神から叱責されるからである。何となれば、人間の魂は霊線によって神に通じているからである。故に悪を行う場合、完全に人の眼を誤魔化し得たとしても、自分の眼を誤魔化す事は出来ないから、人間と神と霊線で繋がっている以上、人間のいかなる行為も神には手にとごとく記録されるといふ訳である。この意味において、悪事ほど割の悪い事はない訳である。

しかしながら、世の中にはこういう人もある。悪事をしようとしても、「もしかやり損って世間に知れたら大変だ、信用を落とし非常な不利益となるから…」という保身的観念からもあり、悪事をすればうまい事とは知りながら、意気地がなくて手を出し得ないという人もある。また世間から信用を得たり、利益になるという観念から善を行う功利的善人もある。また人に親切を行う場合、こうすればいずれば恩返しをするだろう—と、それを期待する者もあるが、このような親切は一種の取引であって、親切を売って恩返しを買うという訳になる。

(2面につづく)

浄霊体験記

2ページ
3ページ

- 絶望の四十二歳救われて九十二歳
- 病弱体質から健康体に変わる…
- 病気も治りマイホームも…

以上述べたような善は、人を苦しめたり社会を毒したりする訳ではないから悪人よりはずっと良いが、真の善人とはいえない。まず消極的善人ともいべきであろう。従ってこのような善人は神仏の御眼からみれば真の善人とはならない。神仏の御眼は人間の肚の底の底まで見通し給うからである。よく世間の人が疑問視する「あんな悪い人がどうしてあんなに不幸だろう」などというのは、人間の眼で見えるからであって、人間の眼は表面ばかりで肚の底は見えないからである。この種の善人も詮じつめれば「見えざるものは信じない」という心理で、何らかの動機に触れ、少々悪事をしても人に知れないと思う場合、それに手を出す憂いがある以上、危険人物ともいえる訳である。これに反し、見えざる神仏を信ずる人は、人の目は誤魔化し得ても神仏の眼は誤魔化せないという信念によって、いかなるうまい話といえども決して乗らないのである。故に現在表面から見れば立派な善人であっても、神仏を信じない人は、いつ悪人に変化するかわからないという危険性を孕んでいる以上、やはり悪に属する人といえよう。

以上の理によって、真の善人とは「信仰あるもの」即ち見えざるものを信ずる人にしてその資格あり——というべきである。故に私は、現在のとき道義的観念の甚だしき頹廢を救うには、信仰以外にないと思うのである。

そうして今日まで犯罪防止の必要から法規を作り、警察、裁判所、監獄等を設けて骨を折っているが、これらは丁度猛獣の危害を防止するため檻を作り、鉄柵を取りめぐらすのと同様である。とすれば、犯罪者は人間として扱われないで、獣類同様の扱いを受けている訳で、折角尊き人間と生まれながら、獣類に墮して生を終るといふ事は、何たる情ない事であろう。人間墮落すれば獣となり、向上すれば神となるというのは不変の真理で、全く人間とは「神と獣との中間である生物」である。この意味において、真の文化人とは獣性から脱却した人間であって、文化の進歩とは、獣性人間が神性人間に向上する事であると私は信ずるのである。従って、神性人間の集まる所——それが地上天国でなくて何であろう。

浄霊によって病苦から救われると共に運命が向上し、幸せになられた方々の体験手記でございます。

子宮筋腫・胃・胸焼け・便秘

絶望の四十二歳 救われて九十二歳

大分支部 鴻上文字子 (92)



私は幼い頃に赤痢の大病をして以来、長年健康で過ごしてきましたが、昭和四十四年、三十七歳の時に突然不正出血になりました。頭も重たかったので病院に行き、診察してもらおうと「子宮筋腫で、放っておけばおくらうと」なるので、なるべく早めに手術をした方がいい」と言われて、その後一年半くらいは、出血があったり頭痛がしたりした時に、病院からもらった薬を服用していました。すると今度は胃の具合が悪くなりました。最初は胸焼け程度でしたが、段々と苦しくなる時があり、便秘もひどくなりました。お腹はパンパンに張り、頭は重く、憂鬱な

毎日でした。

昭和四十六年の秋、私が三十九歳の時、夜中に動悸がして息苦しくなりましたので、往診をお願いしました。注射を二本打ちましたら一時は症状が治まりましたが、次の日は病院に行きました。心電図等、いろんな検査をした結果、「心臓に異常はないが、胃と腸の間に空気が溜まり、それが心臓を圧迫している」と言われ、それから薬、薬の毎日でした。いくら服用しても、良くなるどころか逆に薬が一錠、二錠と増えていき、三年後の四十二歳の頃には八錠服用しないといけない状態になっていました。しかしそれでも良くなり、体重も十三キロ減りました。病院を転々とし、食べることも思うようにいかず、少しでも食べた薬を服用して三十分以上横になっていないと、何も出来ない毎日でした。

私は長く生きられない...

私の弟のお嫁さん(奈良県在住)は、以前から新健康協会の会員でした。私が病気で苦しんでいるのを知り、私に「浄霊を受けてみては？」と勧めてくれていました。しかし私は、「このように医学が進歩している時代に、そんなことがあるわけない」と信じようとはしませんでした。健康新聞も時々送ってくれていましたが、見向きもしていませんでした。

するとその後、首が動かなくなり、うつむくことも横を向くことも出来なくなりました。病院に行つて注射を打ってもらいましたが、あまり効き目はなく、「私はもう長く生きられないのではないのだろうか」と絶望していました。家族からも「今日はどうやっ

た？大丈夫？」と心配ばかりかけていました。

そんな時、昭和四十九年七月頃、四十二歳の時、弟のお嫁さんから電話があり、「大分県にも支部があるから、一度浄霊を受けに行つてみて」と言われました。私も薬を服用しても良くならないので、とりあえず浄霊を試してみようと思い、ワラにも縋る思いで、電車やバスを乗り継いで片道二時間の所を尋ねて行きました。支部で浄霊を受けましたが、まだ半信半疑でした。

浄霊が終わわり、帰りの電車の中で、今まで一度として眠つたことがなかったのですが、その日は駅に着くまでぐっすり眠り込んで、あわてて電車を降りました。すると、今まで重かった頭が急に軽くなつて、ことに気付きびっくりしました。「こんなことがあるの」と思えるくらい信じられないことでした。

私は嬉しくなり、それから一週間に二、三回は支部に行くようになりました。本当は毎日行きたかったのですが、距離もあつたので、毎日行けませんでしたが、それでも、浄霊を受けに行く日はとても楽しみで、目に見えて元気になることが何よりも嬉しかったです。熱や痛みが出ることもありますが、その後は以前よりも元気な体になります。こうした浄化作用のことなども解るようになり、明主様に心から感謝申し上げるようになりました。浄霊を受け始めて六ヵ月位過ぎた頃からは、私も浄霊を出来るようになりたいと思ひ、昭和五十年一月八日、四十三歳で会員となりました。

以来四十九年が経過し、元気で幸福な日々を過ごしております。あの時に浄霊を受けて、本当に良かったと思います。有難うございました。(大分県竹田市)

体のだるさ・風邪

病弱体質から

健康体になる：

川棚支部
岩永藤子 (57)



これは今から五十五年前、昭和四十四年、母が三十四歳、私が二歳の時の話です。

母は昔から病弱で、常に微熱があり、体もだるい感じが続いていました。

なかなか体調が優れないので病院に行ったのですが、症状は改善されず、薬を飲んでも、熱が下がることはなかったそうです。特に風邪を引いた時は、さらに体がだるくなり、高熱も続いて、熱を下げようと解熱剤を服用したのですが、薬の副作用の方が強く、かえって寝込んでしまうことも多々あったそうです。薬を飲むとまた副作用が出るのではないだろうか…と悩む日が続き、少しずつ薬を服用していたようですが、熱は下がりませんでした。

その当時、私も病弱だったようで、注射や薬を服用する生活を繰り返していました。そのためか、幼な心に「薬を飲むのはもう嫌だ…」と、うんざり

していた記憶があります。

そんな時、母の義理のお姉さんが「浄霊という方法があるよ…」と教えてくれました。最初は「浄霊」と聞いても良く分からず、どうしようかと思っていた時、たまたま新健康協会の方が健康新聞を配布しにいられたそうです。母は健康新聞を読んだ時、お姉さんが言っていた浄霊のことはこれか…と思ったそうです。その上、浄霊を受け体が楽になったという体験談が書いてあり、これなら私にも変化があるかも知れない…と思います、当時住んでいた北九州市の戸畑に若松支部の戸畑出張所がありましたので、母は行つたそうです。

体が楽になった：

母は浄霊を受ける内に、今までだるかった体が徐々に楽になったそうです。鼻水やタン等もたくさん出たそうです。すると、頭が軽くなっていくのが分かり、体も楽になりました。

母は長い間悩んでいた熱も下がり、体のだるかった症状も楽になり、その時に今後も浄霊を続けようと思ったそうです。そして、浄霊を受け始めてから三年後の昭和四十七年に若松支部で入会しました。

丁度この頃から私も浄霊を受けるようになり、私が五歳の頃ですが、当時、あまりにも風邪を引いてばかりだったので、心配になった母は、私を連れて支部に行くようになり、支部と自宅でも浄霊を受けました。短期間で風邪も良くなり、それからは「もう浄霊しかない…」と、我が家では浄霊が当たり前になりました。そして、昭和五十一年八月、私は九歳の時、若松支部で入会しました。

そのおかげで自分でも浄霊が出来るようになりました。

その後も、目の回るような高熱が出たり、二十歳を過ぎてから、風疹になったりした時も、浄霊で楽になりました。成人後は、ひどい熱が出るようなこともなくなり、元気な体になりました。浄霊がなければ、私はどうなっていただろう…と思わずにはいられません。

水泡…跡形もなくきれい

三十一歳の時、右足の土踏まずに小さな水泡が出来、次第に足の甲が腫れ、歩くことや車の運転が困難になりました。

それから一週間後に、右足の親指の先から真っ白な液体がドロドロと出ました。その後、全身が熱っぽく、体もだるくなりましたので、仕事を休みました。足首も臭い汁が出るので、包帯を巻き、一日に何度か交換しました。電車での通勤でしたが、右足を床に付けて座っているとジンジンして痛むので、右足を左足のの上に乗せて座っていました。

夜寝る時も痛みがひどく、眠れない時もありました。その度に浄霊を受けました。また、支部の先生を始め、会員の方々、家族の優しい支えで、乗り越えることが出来ました。

水泡が出来て六十日後に、立ち仕事をしていた時、かかとの固い皮膚から、白い液体が自然に流れ出、足がふつと軽くなったのを覚えています。それが最後でした。

体の中にある毒素がたくさん出て、また一歩、健康体に近づいたのだと思います。おかげ様で跡形もなくきれいに良くなりました。

その後、三十二歳の時に主人と結婚し、三人の息子にも恵まれ、現在は主人の実家である長崎県の波佐見町に住んでいます。

明主様、数々の御守護を頂きまして、誠に有難うございました。

(長崎県東彼杵郡)

ネパール 〈神経痛〉

病気も治り

マイホームも：

シャングジャ出張所

スカマヤ・ザラリ (66)



私は入会してから二十年になりました。新健康協会を知る前は、身体全体にしびれを感じており、頭と目が重い状態です。さらに毎日体重が増えます。…と不安になっていきました。

最初は神様にお祓いをしてもらおうと思ひ、神社等に行きましたが、どこに行っても良くならなかったため、病院へ行くこと、「神経痛」と診断されました。治療用の薬を服用しましたが、状態は変わりませんでした。

そんな時、親戚の方から「シャングジャに浄霊という方法をしている場所

があるよ」と教えてもらいましたので、試しに浄霊を受けてみました。

すると段々体の状態が良くなりました。しびれを感じることもなくなり、今まで不安だったことが嘘のように改善され、とても嬉しくなりました。私は今後も浄霊を続けたいと思います。二〇〇四年四月に入会しました。

浄霊を知る前、健康面だけでなく、家庭の状況もあまり良くありませんでした。夫は仕事が多かったので、私が銀行の掃除に行つて何とか生活をしていました。しかし浄霊を始めてからは、自分の体の状態がよくなった上、家族の状況も段々良くなっていったのです。これは本当にすごいと思いました。

現在、夫は二つの学校で掃除の仕事がみつかり、とても喜んでいます。息子は外国で働くようになり、娘たちは幸せな結婚をしました。そして、一番嬉しいことは小さなマイホームを持つようになったように感じました。

これらはすべて明主様のおかげです。誠に有難うございます。

(ネパール・シャングジャ)

浄霊

浄霊は、大自然のエネルギーであり、病気やあらゆる問題で苦しんでいる人、悩んでいる人を救う方法です。

浄霊によって魂は清浄化され、肉体が健康になっていきます。

まずは試されてみてはいかがでしょうか。

自然農法

自然農法体験談



熊本支部
佐藤典二 (67)

自然農法を始めたきっかけ：

私は大分県竹田市でお米と野菜を自然農法で栽培しています。

昭和五十一年、十九歳の時に農業を始めて四十八年が経ちました。当初は化学肥料や農薬を使用して栽培していましたが、体の調子が悪かったことがきっかけで自然農法を知ることとなりました。

平成十八年、体調不良だった私は、病院に行っても思うように良くなりませんでした。そんな時、新健康協会の会員さんと出会い「浄霊」を知りました。浄霊を受けると体が徐々に楽になりましたので、その後も浄霊を続けていくと、「自然農法」の話も聞くようになり、私も自然農法をやってみよう…と思ったのが始まりです。

作物に寄り添う

全ての田んぼと畑をいきなり自然農法に切り替えることは難しかったので、徐々に範囲を広げていきました。自然農法を始めてから試行錯誤の連続で大きな不作になったこともありましたが、それでも、私は稲や野菜が育つお手伝いをしたい…と丹精込めて作物に寄り添いました。

自然農法を始めて五年が経った頃から、年々土が良くなってきていると感じています。水不足で収穫を諦めた時もありましたが、土としっかりした苗のおかげで、平年並みの収穫を得ることも出来ました。感謝の一言につきまます。

自然農法とは自然を尊び、愛情をかけて育てることで、自然力を生かす農法です。

自然界の素晴らしさを実感：

自然の素晴らしさ、土が出来ていく姿を目の当たりにし、「本当にこの自然界というのは、うまく出来ているなあ」と思います。私は、この自然に立ち向かうのではなく、素直に寄り添っていく生活そのものが大事であり、日本の農業が成り立っていく道ではないかと思っています。

おかげ様で、自然農法で育ったお米や野菜を食べて頂いた方から、「おいしい」「ありがとう」との励ましを頂き、それが次へ進む力となっています。これからも、きれいな空気、きれいな水、きれいな土で育ったお米や野菜をより多くの方に食べ頂けるよう頑張っていきたいと思っています。



田んぼで作業をされる佐藤さん

美の世界

美によって人間の情操を高め、生活を豊かにし、人生を楽しく意義あるものにすることができます。

《信楽焼茶碗 銘「わび物」》 (江戸初期)

人の暮らしに不可欠で、古い歴史を持つやきもの。日本列島のなかでもそれぞれの土地の特質を備えたやきものが生まれてきました。材料の土や燃料となる木材を調達するため、山間部が産地となることが多くあります。本作、信楽焼もまた周囲を山に囲まれ、大戸川流域にそって小さな盆地が連なる地域でつくられてきたものです。

平安時代後期から鎌倉・室町時代の中世に築かれ、現代に至るまで生産が続けられている代表的な六つの窯を「六古窯」と称し、瀬戸、常滑、越前、丹波、備前とともに信楽もこれに数えられています。もともと平安中期には緑釉陶器がつくられていたようですが、信楽焼としての歴史は十三世紀半ば頃、常滑焼の技術導入を受けて始まり、十四世紀半ば頃から固有の特徴をもった信楽焼が成立したとみられています。その後の茶の湯の流行、特に村田珠光が創始した「わび茶」スタイルの隆盛に合わせ、茶陶としても重宝されるようになりました。

珠光はそれまでの唐物中心の喫茶文化に和物を調和させるか、そしてその時美意識はいかにあるべきかについて書き残しています。その中でも「ひせん物、しからき物」と言及があるように、珠光が亡くなる十六世紀までには備前焼や信楽焼が茶の湯で盛んに使われていたことがわかります。始めは別の用途のものが茶道具に見立てられ、信楽焼では種壺や油壺、麻の繊維を水につけておくための苧麻桶(緒桶)などが水指として用されることが多く、前者は形によっては「蹲」、

後者は「鬼桶水指」と呼ばれて愛好されました。次第に茶陶としての生産が進み、本作の茶碗でもほんのりと赤く焦げた肌が鉄分の少ない信楽の土の特徴をよく表しており、口縁から流れて溜まる深緑の自然釉が趣深い景色をみせています。

江戸時代に入ると生産量も製品の種類も増え、将軍家に献上される茶の容れ物「腰白茶壺」や京焼風の小物施釉陶器、神仏具、日用品もつくられるようになり、近代以降は製糸工場の糸取鍋、理化学陶器、建材としてのタイルとさらなる変化を遂げました。信楽焼は時代の要請に応じて変化し続け、それぞれの時代で他所に代わることでできないやきものを提示し続けています。



解説 松田愛子

晴明会館 「山の景」展

期間…令和6年10月1日(火)～令和7年5月13日(火)

※晴明会館お問い合わせ ☎(092)661-1535

健康新聞についてのお問い合わせは (092)661-1531まで